

## 8-1 評 價

## 811 TPI諸指標の研究 (1)

- 長塚和弥(埼玉大学)  
肥田直(東京大学)  
古沢頼雄(日本女子大学)

## 812 TPIコードの研究

- 肥田直(東京大学)  
○坪上宏(国立精神衛生研究所)  
平田久雄(東京大学)  
堀 久(都立小石川高校)

## 813 選択肢の重みづけの方法

- 芝祐順(東京大学)

## 814 EPPSの研究(その6)

- 岩脇三良(防衛大学校)  
肥田直(東京大学)  
福原真知子(武藏野美術大学)

## 815 京大NX知能検査報告 (5)

- 一社会的経済的条件と下位検査成績  
○宮出正子(京都大学)  
倉石精一(〃)  
芋坂良二(〃)

## 816 大学校職員に施行したロールシヤツ

- ハテスト  
一知的水準について  
板谷美代子(園田学園女子短大)

## 817 知能構造の地域差の研究

- 一山形県児童と関西児童の比較  
○村田明(山形大学)

椎野信治(〃)

## 部会の全体的特徴

発表された研究は大別すると、テスト理論、性格検査、知能検査の3つにわけられる。知能検査では京大NX知能検査を用い、宮出ら(815)は階層差を、村田ら(817)は地域差を取り上げた。性格検査では、ロールシヤツハテストを高知能群に適用した板谷(816)の研究結果と、長塚ら(811)と坪上ら(812)との質問紙法

形式のTPIおよび岩脇ら(814)EPPS両検査開発の基本的資料とが提供された。芝(813)は検査選択肢の重みづけに関する一方方法を提案した。

全発表は所定の時間内に完了したので、発表後の補足もなく、直ちに質疑討論が行なわた。討議は個々の資料に対する質疑応答から発展して、検査全般に関連のある問題に亘り、参加者の間で活発な意見が交換された。

## 討議の内容

## (a) 検査理論

「選択肢の重みづけ法」について、各人の選択数の逆数をあらわす対角行列  $C^{-1}$  を2つの  $C^{-\frac{1}{2}}$  にわけると、従来の principal components と同じ形になるとと思われるという池田(立大)の発言に対して、芝はその通りであるが、従来の principal component を選択数について基準化した形をとっている点に特徴があると答えた。

## (b) 性格検査

TPIの研究などに関連して、続(名古屋大学)より異常者の診断の正確さおよび正常者群設定についての保証が問われた。正常者群・異常者群を100%保証することは実際上かなり困難であることが論じられ(岩脇)、われわれがふつう、正常者群として扱っている資料には異常者も若干まじつているという意味で、たとえば正常・異常の cutting point を決める場合には、測定誤差のあることを考慮して基準に多少の幅をもたせる必要があると強調された(続)。

板谷(816)の研究に対して、倉石(京大)は、いわゆる大学人といわれる高知能群内の個人差を質問した。板谷は臨床的に各事例を調べていくつもりであると答えてのち、ロールシヤツハテストが知的水準に関してもつていてる正常者基準と異常者基準の弁別力、大学人のEgo機能などについて説明を加え、今後の研究方向を述べた。さらに、学校における研究生活では適応しているが、日常行動ではいわゆる変わり者といわれる被験者の例をあげ、大学人と一般社会人とのロールシヤツハ反応を比較する必要があると付言された。

## (c) 知能検査

京大NX知能検査結果の正規分布に関する質疑応答が使用者村田(817)と京大教育心理学研究室関係者との

## 教育心理学年報 第5集

間で展開され、少なくとも京大NX知能検査の下位テストでは必ずしも正規分布しないことがわかつてゐるという発言があつた（倉石）。山形市において知能検査の練習傾向があるという報告（村田）があつたのち、議論は階層差、地域差に関連した諸問題へ移行した。

一般に、社会経済的レベルをどのような方法あるいは基準で測定するかという質疑に対し、社会経済的レベルを測定したり、この要因をコントロールして年令差、地域差を比較することの困難さについて、いくつかの発言があつた。たとえば国際間の比較研究をする場合、各國間および各国内で相対的比較と絶対的比較の両方をたえず考慮すべきであるという意見（倉石）がでた。

社会経済的条件による知能差が見いだされたら、それをどのように発展させるのか、例えば上層型の知能構造というようなものを明らかにしていくのか、あるいはそうすることが可能なのかという続の間に對し、宮出（815）は差異の出てきた条件の諸要因をほりさげて検討し、それら要因の関係を明きらかにしていきたいと答えた。共同研究者である倉石は知能構造の階層差を追究したり、教育的環境の分析を行なう意図があることを補足した。

ついで、知能検査を通じて、知能に関するこれらの問題が大雑把に把握されても、検査結果が果たして具体的な教育の問題とどのように結びつくか、そのために、現在使用されている知能検査が十分に役立ちうるものか討

論された。苧坂（京大）は地域差、階層差などを検討するにせよ、知能検査や性格検査など研究に使用される道具の科学的根拠を追究し、生物学的・心理学的・社会的存在である person 測定をしようとするのであるから、広い視野に立つて、人間を測定する道具を根本的につくり直す必要性を説いた。苧坂によると、科学的根拠が確立されていない評価を続けるかぎり、いつまでたつても同じ水準の研究が繰り返されるだけで、進歩がない。肥田野（東大）は階層差、地域差、年令差などの条件分析をしていくことは教育的にみても非常に大切な課題であると述べて、各地域、各年令などの normative な資料を獲得していく場合には、検査の使用が必要であろうが、得られた結果の差異を説明するための道具としては心理検査は無力であるという意見を提出した。

I Q を素質的なものとみないで、教育環境の影響を受けた進歩の measure とみるべきであるという論文の紹介があつたところで、部会の討論を閉じた。

以上の質疑応答や意見の交換の過程を通じて、基準群設定の問題、心理検査使用の限界、道具としての検査のあり方、研究にもちこまれる諸変数の把握など、評価に関連のある重要な問題点が明らかにされ、心理学研究における評価法のあり方についていくつかの示唆が与えられたことは本部会を有意義なものとした。

（岩脇三良、芝 祐順）

## 8-2 評 価

## 821 MBTI 日本版標準化の試み

(その1)

○加 茂 富美子（日本リクルート）  
井 上 健 治（千葉大学）  
和 田 武 治（日本リクルート）  
セ ン タ ー

## 822 MBTI 日本版標準化の試み

(その2)

○稻 橋 喜美子（日本リクルート）  
江 福 浩 正（セ ン タ ー）  
芝 祐 順（東京大学）

## 823 MBTI 日本版標準化の試み

(その3)

○大 津 武 志（日本リクルート）  
セ ン タ ー

橋 口 英 俊（東京大学）  
永 田 嘉 代（日本リクルート）  
セ ン タ ー

## 824, 825 MHSQ Form II (RST)

日本標準化の試み I, II

①園 原 太 郎（京都大学）  
②畠 中 達（セ ン タ ー）  
対 馬 忠（セ ン タ ー）

## 部会の全体的特徴

本部会では2種類の新しく開発された性格検査について、その紹介ならびに標準化に際しての種々の検討結果が報告された。即ち、最初に加茂、稻橋、大沢ら（823）による「MBTI 日本版標準化について」の共同研究、引き続いて園原、畠中ら（824）による「MHSQ Form II